「弘前×フランス」の交流 L
～弘前の魅力を再発見～

弘前大学に在籍するフランスのボルドーからの留学生・ロバン(Robin)さん、ソフィ(Sophie)さん、マルゴ(Margot)さんの3人と一緒に土手町から弘前公園までをまちあるきしました。留学生は勉強中の日本語や英語で話してくれました。

―弘前のいいところは何ですか?

弘前に来る前はもっと田舎を想像していましたが、意外と様々な建物があり暮らしていて楽しいです。正直、東京のような大都会より弘前の方が落ち着いていて好きです。城のある街はフランスにもありますが、弘前(日本)はまだ違う歴史や様子(趣き)で魅力的です。

―弘前でよく行くところはどこですか?

弘前公園です。公園の内外を歩くだけで日本らしさが伝わってきます。弘前公園では桜まつり以外にもお祭りもあると聞きました。その時期の雰囲気も味わってみたいです。

―弘前の祭りを見たことがありますか?

まだ桜まつりしか見ていないので、ぜひ他の祭りも見てみたいです。(ねぶた祭り、雪灯籠まつりの写真を見て)おぉ!すごいですね。この雪像や灯篭をつくっているのが、自衛隊なのは驚きです。まるで芸術家だ!

―弘前のゴミ箱やWi-Fi環境についてどう思いますか?

今は慣れましたが、ボルドーにはもっとゴミ箱があるので初めは大変でした。弘前はゴミ箱が少ないのに、落ちているゴミは少ないのが不思議です。でも、ゴミ箱はもっと街中に欲しいです。また外国人はスマートフォンの契約が多いので、Wi-Fiが特定の場所でしか使えないことはとても不便です。スマートフォンが使いやすい環境が欲しいです。

―弘前の多言語案記・対応についてどう思いますか?

電車で移動するときに不便だと感じました。もっと外国語案記や説明、対応(少なくとも英語)できればフランス語やスペイン語が聞えてほしいです。

留学生と一緒に弘前の街を歩いてみて、弘前の魅力を再発見できましたが、同時にいくつかの課題も見つかりました。弘前の景所に限らず、課題についてはみなさんと一緒に考えていきたいです。弘前をよりよい街にしていきましょう!

(2年　藤木亜美・鼻和佑名・齋藤愛子・山口ひより・松嶋ひかる)

一緒に黄金焼(おやき)を食べたら、意外とウケました。

ご案内

タイトル横にLがついている記事は弘前大学フランス語ホームページでロングバージョンを公開しております。掲載ページは右のQRコードよりアクセスできます。

弘前大学フランス語ホームページ
Place de la Francophonie/「フランコフォニー広場」
→ http://human.cc.hirosaki-u.ac.jp/french/

新着情報・おすすめ情報はTOPページで一目瞭然!
Twitter・Facebookへも、サイドバーからも直接にアクセスできます。

Twitter「豆知識・豆情報も積もれば… 山となる!」
→ https://twitter.com/Hirodai_French

ホームページ　Facebookページ　Twitter

Tu sais, j'ai trouvé!
あのね、見つけた!
弘前の中のフランスを探そう!

Vol.9

「弘前×フランス」プロジェクト　弘前グローカル・アクション　発行

編集:弘前大学人文社会科学部2年　鎌田翔
プロジェクトの正式名称:複言語・複文化教育プロジェクト(フランス語モデル)
「平成31年度弘前市市民参加型まちづくり1%システム」対象事業

弘前れんが倉庫美術館をデザインした田根剛さんに迫る L

弘前れんが倉庫美術館は、吉野町煉瓦倉庫を改修し2020年4月11日新たに開館する美術館です。国内外の先進的なアートを紹介するとともに、スタジオやライブラリーも備え、地域に開かれた文化創造の拠点を目指しています。
www.hirosaki-moca.jp
Instagram: hirosaki_moca

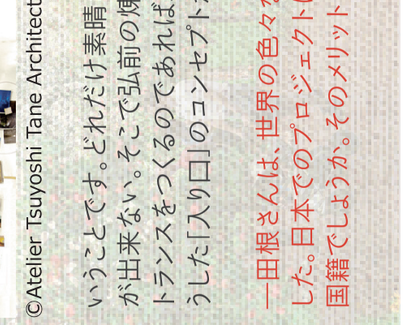
©Yoshiaki Tsutsui

1979年東京生まれ。北海道東海大学芸術工学部建築学科卒業。Atelier Tsuyoshi Tane Architects代表。主な作品に、「エストニア国立博物館」(2016)、「Todoroki House in Valleyi」(2018)、「とらやパリ店」(2015)、「弘前れんが倉庫美術館」など多数。フランス文化庁新進建築家賞(2008)、フランス国外建築賞グランプリ(2016)、ミース・ファン・デル・ローエ欧州賞2017ノミネート、第67回芸術選奨文部科学大臣新人賞(2017)、アーキテクト・オブ・ザ・イヤー2019など多数受賞。フランス・パリを拠点に活動。

当リーフレット第8号でもとりあげた吉野町煉瓦倉庫が、いよいよ2020年4月に「弘前れんが倉庫美術館」としてオープンします!そのリノベーションを手掛け、世界的に活躍する建築家・田根剛さんに、ご多忙の中、特別にインタビューに回答していただきました。

―その場所に積み重なった歴史を大切にする、というのがテーマのひとつにある田根さんですが、かつての城址や地形を維持している弘前市の建物をデザインするに当たって、意識して取り入れた部分などはありますか。

吉野町の煉瓦倉庫群は、明治・大正期に建てられ、日本で初めて大々的にシードルが生産されたところです。厳しい雪国の中で、支えてきた。厳しい雪国の中で、煉瓦倉庫群は増築や改築を繰り返しながら、文化遺産でもあります。そして時代とともに失われてきましたが、目的としていくために、「入り口」のコンセプトから考えはじめました。現代煉瓦建築としての風景を映し出すことをイメージしています。



©Atelier Tsuyoshi Tane Architects

―2018年の田根さんの展覧会では、'gate as hole'とメモ書きされた写真資料が、煉瓦倉庫の建築デザインを固めていく過程の展示のなかにありました。エントランスのデザインに込めた意味、コンセプトはどういったものでしょうか。

'gate as hole'という意味に込めたのは、「入口には穴が開いている」と思えば、どのように来場者を招き入れるのか、そして積極的に活用する事例はまだ数少なく、取り壊される。現代において国内で同じ工法で煉瓦倉庫が美術館として文化施設のエンジンとして再生できるのか、という問いから考えはじめました。

―10ヶ国くらいのインターナショナルなスタッフが集まっているので、プロジェクトチームは常に多国籍で編成します。それは建築の議論を活発にし、既成概念を取り払い、同じ対象を見ていても、思いもよらないような議論が出てきたりします。文化的、社会的、政治的、思想的な背景が異なるチームならば、グローバルにも価値のあるコンセプトが案出できると思っています。

©Atelier Tsuyoshi Tane Architects

―様々な国の人たちがプロジェクトに関わっているので、英語でやりとりをしていると聞きました。話し合いをする際、母国語ではないことが原因で伝えるのに苦労したことなどはありますか。

その逆も考えられます。異国語であるからこそ、物事をシンプルに考え、シンプルに伝えることが出来る。英語や仏語はそうした意味では有効な言語です。言語は自分自身が海外で働き始めたときは、苦労したこともありましたが、会話やミーティングの中で繰り返し、経験してきたことは確実に力になります。今の事務所では、スタッフの大半はフランス以外の国から来ているので、コミュニケーションはほぼ英語。ただ、フランスのプロジェクトはフランス語で打合せたり、話せる人同士は、フランス語やイタリア語、日本語などで話したりもする。みんなそれぞれに伝えられる言語を学ぶのは、良いことだと思っています。

―私たち弘前市民は「弘前れんが倉庫美術館」の完成を楽しみにしています。市民に向けて一言あればお願いします。

弘前は歴史と文化がある街だからこそ、そこに現代アートが新たな息吹として入り込むことで、これからの弘前の未来を創造的にしていける場所になればと思っています。また弘前に「アート」がやってくることで、全国または世界から来場者が訪れ、新たな文化交流がはじまります。市民に開かれた文化施設として、パブリックスペースでは様々なイベントや活動が企画され、また別棟に再生した「シードル・カフェ」は、アートと市民を繋ぐ「吉野町緑地の中心の場所になることを目指しました。「煉瓦倉庫」と「シードル」、その記憶の継承と風景の再生によって生まれる新たな芸術文化施設に弘前市民の皆さまが集い、弘前を世界へと繋げる場所となればと思います。

(3年　相原寿貴・佐藤瑞紀・齋藤莉帆・後藤乃愛・對馬伊織)

モロッコとフランス、そして弘前の架け橋に
～日常の中の非日常～

tabia2.(タビアドゥ)とは?

北アフリカに位置するモロッコは、ベルベル文化とアラビア文化、ヨーロッパ文化が融合する国。かつてフランス領だった影響で、フランス語圏でもあります。「tabia2.」はモロッコをコンセプトに、ご夫婦で経営する雑貨屋さん。モロッコの職人が手作りした織物や器、衣類など暮らしにまつわる商品が並びます。ご夫婦は、モロッコ出身アディールさんと弘前出身の樹里さん。店名「tabia」は、旦那さんの愛称でもあり、アラビア語で「自然・野生」を意味します。「2」は、モロッコではじめた民宿「dar tabia」に次ぐ2番目のプロジェクト、という意味です。

モロッコ文化を弘前にも広めたい

樹里さんは、フランス人の建築家、ル・コルビュジエが好きで、建築を学びにワーキング・ホリデーで渡仏。モロッコを訪れた際に、その空気に魅了され、縁があって宿泊した宿で働くことに。そこでアディールさんと出逢い、故郷にモロッコ文化を伝えたいという想いから「tabia2.」を開きました。

―樹里さんはモロッコ文化のどこに惹かれましたか?

シンプルな暮らしと人の温かさやおおらかさ、細かいことを気にしない、人間のあるべき姿と思えるモロッコ人の性格です。

―夫婦間で言語の壁は感じますか?

普段、フランス語で話しています。モロッコでのフランス語はフランス本土よりも発音が聞きやすく、フランス語が上達しました。言い合いになる場合は、言いたいことを伝えきれないという言語の壁が夫婦円満の秘訣にもなっています。

―アディールさんは来日することに抵抗はなかったのですか?

どんな場所でも自然体なため、弘前に来てからも気にせずに暮らしています。ご近所の方とも片言の日本語で仲良くなりました。来日した時は弘前の雪に感動しました。日本食の中で納豆がお気に入りで、モロッコでも納豆を作って食べるようになりました。

「tabia2.」はモロッコという異文化と地域をつなぐコミュニティです。さらに、モロッコ文化に触れてもらうために、モロッコカフェを併設する計画をしています。開店が楽しみですね。樹里さんにとって、モロッコは「自分自身を見直すことができる国、そんな感覚を「tabia2.」でご夫婦と一緒に会話を通じて味わってみませんか?

(2年　山口朋華・米内山由貴・尾野海琴)

●住所…弘前市清水3-1-18　●電話…080-9587-3979
●営業時間・定休日…(不定)Instagram(@tabia2_)を参照